

江戸の吉原色の里。トリというその女は、この町しか知らずに育った。とはいえ遊女ではない。上背があり、少し顔がきついが、醜女というほどではけつしてないトリは、しかし禿をやらす、新造にならず、物心ついた時分から刀を握っていた。トリは首代と呼ばれる、吉原の用心棒のひとりだ。髪は結わずにジレッタ結び、羽織と帯は錆鼠黒鼠。納戸の小袖に、覗く襦袢は瓶覗。足元下駄はすり減らし、腰には二尺の打刀。羽織って脱がぬ羽織の下は、背に劔花權の判じを背負う。トリというのはそういう女であった。

今のトリは裏茶屋の一室にいる。乱れた布団の上で、開いた着物の前も合わせず寝ころがっている。

「はよう、マエを隠したらどない」

だらしのないトリの膝小僧を、女の細い手が叩く。三十路前の女しかし髪だけは禿のごとき切り揃えたおかつぱで、尼だか童だかわからぬような浮き世離れた姿をしている。

「なんでそう毎度毎度、チャツチャ、チャツチャと急かすんでえ」

「わたいら、こないなどこでのんびりキセルでも吹かすとれるような仲か。素っ裸で見つかつてみい、言い訳きかんど。ナリくらいいしゃんとせえ」

トリが不満げに言うのと、おかつぱ女は冷たく叱る。女の言葉は上方のものだ。トリ以外に、この女が大坂言葉で喋るなどと誰も知らないはずだ。おかつぱ頭は、仰木屋という大見世にいる女だ。

しかしこれも遊女ではない。袖雲という花魁に付く番頭新造（世話役）である。スミと呼ばれている。

「へっ。おめえは帯のひとつも、緩めねえくせによ……」

トリは口の端を嫌味に上げて、着物をつかみ合わせながら身を起こす。おスミは藍の着物の襟を少し整えるだけで、脱いだような跡はない。おスミはトリと床を共にしても着物を脱がない。トリにしてみれば不満だったが、相手は言つてきかせて応じるタマではない。力ずくでどうにかする気もない。だから諦めている。

「言うたやろ。わたいはもう、人様から吸う唾む撫ぜると身体中ねぶりまわされんの、飽いたんや」

おスミが澄ました顔で髪を梳く。

「オイラによるしゅうお頼み申すつてンなら、たまにヤア大盤振る舞いのヒトツでもしてもれえてえもんだ」

トリは布団の上に突っ立って、羽織りっぱなしの羽織の下に帯をくぐらせ、低い位置で締める。はつきりと聞いたわけではないが、おスミも遊女であったとトリは知っている。番新（番頭新造）など、たいていは年季明けの遊女がなるものだ。外で生きていくすべを持たぬ女が廓に舞い戻つてなることが多いものだ。だがおスミがここ吉原にいた話は知らない。一年か二年か前に、外からやつてきた女だった。滑るような上方言葉からして、大坂は新町のお女郎であったろうかとトリは見当をつけていた……。

「十分ええ思ひしとるやろ」

ニヤリと笑つてバツサリ切り捨て、おスミもすつくと立ち上がる。裾を払つて整えて、廊下に繋がる襖を開ける。

「ほな、あんじょう頼んだで」

「そいつも毎度同じじゃあねえか、そろそろ言うだけ野暮つてもんだ」

見返りおスミの鼻先に、トリも呆れ笑つて切り返す。

毎度毎度繰り返すうちに、見えてくるものもある。けれど面と向かつて探つたつてそれも野暮だ。